

## 歴研創立80年に向けて

## 大会テーマ今昔，雑感

1950年代なかば、大学院生の私（53年学部卒業）は、歴研委員になってみて驚いた。脳裏に焼きつく印象のなかで特記すべきは、まず当時の岩波書店が委員会ごとに用意してくれた特上にぎり鮨のうまかったこと[その思い出のホロ苦さ]、つぎに委員会では次回大会テーマを何にするかという主要議題の議論で毎回明け暮れる「場」だったことだ。土井正興書記長の苦勞は大変だったナと思う。会誌編集から会務全般が書記局（書記長と奥さんの土井道子さん）の肩にかかっていた（忘れてならないのは、さらにむかしの倉橋文雄時代をはじめ、歴研の歴史が、そうした志ある個人々の犠牲の上に成り立ってきたという事実）。

会員は会費納入をサボり赤字が膨らむ一方なのに、委員のアタマ数は年々増えるばかり。「船頭多くして……」の喩えどおり、アアでもないコウでもない大会テーマ論議を楽しむだけの委員会。その3、4年間、私の驚きあきれの委員初体験（その間、書記長は中村義、児玉彰三郎と変わる）が終わった翌年の59年春には（このとき書記局の顔ぶれはまた変わっていて古屋哲夫書記長と白倉司朗書記局員のコンビ）、果たして「歴研危機」はついに破裂、岩波書店から会誌刊行を断られる。書店買い一般読者も激減していたからだ。

青木書店の救いの手にすがり、起死回生、超小型の委員会（私はふたたび参加）が活動を再開した。会誌編集と財政正常化とが最重点。そのときの情景も忘れられない。裸電球のうす暗い事務所で委員会＝編集会議。石母田正編集長がノートを繰り計算をして采配ふるう。山口啓二幹事が会員構成や収支分析から示す未来へのポテンシャル。片隅の補助イスに端然と座す江口朴郎委員長。会の運営スタイルは一変した。61年私は幹事になるが、会報（のちの月報）No.29 [62年4月] はそうした変化を反映すると自負している。あらためて「大会をどう準備するか」を問題にできるようになった（会報 Nos.

30～34）。

だが、「歴研危機」前後が本稿の話題ではない。本題の大会テーマへと話を進めよう。

歴史学研究会は、官庁用語ないし業界用語での日本の「学協会」のなかで、かなり特異な存在だ。学会誌の特集号はザラにある。だが、年次大会のたび、統一テーマを定めようとするのは、珍しい。それが歴研の性であり売りなのだ。1932年創立時、満州国や5.15事件など「時局」と向きあった批判精神、1945年連合国への降伏後まもなく会再建時の決意。そこで宣言された歴研綱領が示すように、「学問の自由と自主性」・「社会〔人民〕と結びつく学問〔科学〕」をめざす研究者一人一人の主体性の自覚、日本国家がかかえる「歴史認識」問題への批判を先取りして歴史学を改革する課題の自覚、に支えられた「知の運動体」という性格が、そうした「共同研究」志向型の学会活動スタイルを生みださせたのだ。

これをもって偏頗な党派性、政治の押しつけ・引き回し、不毛の科学運動などと切捨て捨てる批評には、同調・反撥や好き・嫌いの主観とは別次元で、20世紀知性の歩みに生じた1945年状況の深層をつかむ歴史の「現場」感覚に欠けるところがあるだろう。それどころか、現在では、それは学術の先端的営みにおいて再評価されはじめた動機づけを含んでさえいる（末尾で触れる）。しかし、歴研の歩みの実際面では、それが、ときに錯誤・過失、失敗・混迷、凡庸・的はずれ、流行あと追い・自己満足、無為無策・漂流に堕ちこむ仕掛けとなることがあったのも、否定することはできぬ反省事項ではないか。

最初期の大会テーマは、以下のように並ぶ。世間によく知られた出発だった。

- 1949年 世界史の基本法則——各社会構成における基本的矛盾について
- 50年 国家権力の諸段階
- 51年 歴史における民族の問題
- 52年 民族の文化について

- 53年 世界史におけるアジア  
 54年 歴史と現代  
 55年 歴史と民衆  
 56年 時代区分上の理論的諸問題  
 57年 戦後歴史学的方法的反省（サブテーマをおく部分あり [古代：古代国家と小農民—土地所有を中心として、封建後期：幕藩体制の成立をめぐる]）  
 58年 統一テーマなし（実質的に、部会リレー方式 [古代〈日本史・東洋史・西洋史〉、封建、近代]。この大会報告号となった本誌 No. 229 [59年3月号] が岩波書店発行の最終号)

敗戦直後の数年間、大日本帝国の破綻という現実のもとで、暗い谷間から躍り出た批判的歴史研究者の発言の社会的影響力や、歴史学が知識・思想の領域において占めた地位の重みは、いまでは想像を絶するほどのものだった。学校での教科書墨塗りや「現人神」<sup>あらひとがみ</sup> 天皇の人間宣言など、つくられた「通念」の解体・抹消は、2011年の原発「安全神話」崩壊をすら上回る社会意識のドンデン返し。だから、「世界史の基本法則」大会（報告者：松本新八郎・高橋幸八郎・塩田庄兵衛）および「国家権力の諸段階」大会（報告者：西嶋定生・永原慶二・堀敏一・石母田正・江口朴郎）と、それら報告集（別冊）の刊行とは、社会的事件たりえたのだ。それは、戦時下の秘かな思索と解き放たれた構想力との一斉開花だった。

つづく「民族の問題」と「民族の文化」の大会は、朝鮮戦争とたちまち顕在化した「逆コース」のもと、政治情勢の判断に生じた分裂・対立の背景を反映しつつ、「国民的歴史学」運動の実践とつながることによって、社会の関心をひいた。個別報告の意図・内容や学術的討論とかかわりなく、テーマのメッセージ性が独り歩きした面もある。歴史学研究会は、「政治と学問」の応用問題を練習する機会を得ただけでなく、現在にまでおよぶ民族的従属と自立という現実的な課題への歴史学的取り組みをためす最初の機会をもったのだった。

だが、これを境に起きたのは萎縮だったのか？ 大会は急速に歴研の内輪の行事になりはじめる。社

会に働きかけて知の方向づけ<sup>オリエンテーション</sup>を領導しようといった気概は失われ、世界や社会の動き [とその理解] を歴史学として内在的に受けとめようとする受動的対応の姿勢が強まる。大会をいかに組み立てるかという技術論、したがってテーマ設定の工夫が、先行するようになる。実際には研究関心の個別分散化が押しとどめがたく進行する状況なのに、戦中のカタコンベの密室談義の名残をとどめた既存部会しか頼るものなく、並行的に毎年出版されていた『歴史学の成果と課題』も息切れ状況。全体的議論を呼びさます機軸を見つける知恵は枯渇し、迷いは深まるばかり。私が委員となって目撃した異様な光景は、それだったのだ。埒の明かなさに、フランス史の金沢誠さんの箴言や中国史の小倉芳彦さんの警句が繰り返された。当惑していたのは、私だけでなく、関係者だれもがそうだったらしい。

「アジア」のあと、「歴史と現代」、「民衆」、「時代区分」とひねりだした後、「戦後歴史学的方法的反省」はついに万策尽きた感じ。なお、1957年のこの破滅のテーマがその後は市民権を与えられ、こんにち史学史の「同時代史」的語り口の定番と化してさえいる姿は、驚き累乗だ。58年～61年の統一テーマなしの漂流は不可避となった。対出版社関係や負債からくる存亡問題ではなく、これこそが歴研の危機だったのだ。そんな沈滞のなかで、たゆまず大会とそれへの日常活動を支えた会員・委員の努力は顕彰ものである。61年の芝原拓自報告「明治維新の世界史的位置」は、大会とその後に関心を甦らす一陣の風といえた。だが、63年大会の総合セッション「東アジア歴史像」（報告者：堀敏一、遠山茂樹）へとつながるこの動きも、「60年安保」後の米国仕立て「近代化」論キャンペーンが直接の刺激剤で、それへの批判的応答<sup>レスポンス</sup>だった側面を忘れるわけにはいかない。

幹事として私が立案し委員会の支持と承認をえた長期プランは、まずいったん開きなおって、大小や相互の整合性など問わずそれぞれ意味ある専攻領域の「現場」づくり（部会）の機動的再編<sup>くみかえ</sup>と交流深化を進め、おのおの「共同研究」課題を見定めなおす作業から再出発し、そこからやがて全体的総合課題（統一テーマ）を発見していこう、というものだった。そこで、62年大会は「歴史学研究の当面する課題」

として律令制、領主制、幕末経済構造、産業資本期、帝国主義世界体制を並列的に掲げ、63年大会では課題をもっとバラケさせ多様化する一方、「東アジア歴史像」の総合セッションを置くという実験をおこなったのだ。私は幹事の機能を廃止・分割する運営体制の改革を認めてもらって退いたから、それ以後については直接責任がないが、観察するところ、64年大会以降、現在までつづく大会の構成スタイル〔古代・中世・近世・近代・現代の部会を土台に、歴研本来の統一テーマ方式〕が固まってきたように思われる（「総合」は「全体会」となり、「合同部会」・「特設部会」など機動性をもったダイナミックな運営が「予定どおり」実現されてきた）。

1950年代半ば、終局なき討議への空しさを耐えての参加から、60年代初め、手探り・無手勝流で取り組んだ実験までの間、20歳代半ば～30歳代早々の私が歴研で学習し参与参画したささやかな経験は、その後、別の場所でおおいに役立つことになった。ことに、60年代後半から90年代初頭にかけて、私が責任者となって国内・国際共同研究プログラムを組織する仕事に従事したとき、それを痛感した。たとえば、①「イスラーム化と近代化」研究（東京外語大AA研）、②「日本・アラブ関係」国際共同研究（日本側：国内委員会、アラブ側：アラブ連盟アラブ研究所）、③「中東の社会変化とイスラーム」研究（科研費特定研究）、④「イスラームの都市性」比較研究（科研費重点領域研究）など〔③を例外として、他には国際プログラムの局面もあった〕。ここで、①と④では、「イスラーム化」や「都市性」のような基礎概念的でありながら多義的で多重構造で再帰性もち多方向への展開が可能な概念を軸にすえて、多元的なアプローチを交錯的に比較考察する共同作業は、イスラーム研究の新しい位相を開拓できるだけでなく、巨視的に「近代性」をめぐり世界史認識の組み換えというパラダイム変換ともつながる可能性を秘めているうえ、すぐれてメディアの世界認識や国際政治の政策構想にも変更を迫るような参照枠組を提示する現実的効果まで期待することができる。これと比較すると、上記の②や③は、問題の立て方＝課題設定に発見・開拓的（heuristic）動機づけがやや乏しく、設定そのものに予想される解答が部分的に

含まれ、得られた知見・解釈の適用をもって問題「解決」としてしまいう可能性もある。

つまり、歴研大会には、いったいどんな展開になるか分からずワクワクするようなテーマが欲しいのだ。ダメなテーマ設定は、見るからに研究論文のタイトル、研究書の目次、新酒仕様の舶来〔翻訳〕概念詮索、の類。要求・立場を明示する政治スローガンもどき、人集め主眼の新設学部名称選定もどき、常識の手垢にまみれた物欲しげ用語法の研究資金申請書もどきも、論外。歴研委員は、歴史研究の未来を洞察し、効果的ネットワーク化の情報網・見識・行動力、多様性を保障する結節点選択の鑑識眼、をあわせもち、文明・国際・社会の現実<sup>アクチュアリティーズ</sup>に働きかける知的戦略を練る、大会テーマ設計の専門家とならなければならないだろう。それが、自分自身の仕事でも、関係部会や研究会の運営でも、大きなプラスになる。会員は、自分の研究をたえず全体の動向のなかに位置づけ意味づける努力が必要だ。

1964年以降の大会テーマ（要点簡略化）を整理してみる。意外に継続課題が目立つ〔\*関心軸が持続したとみられる期間の始点、∴ユニークなテーマが続発した時期の始点〕。\*64年「歴史教育における戦争」、65年「東アジア：変革の諸形態」、66年「東アジア歴史像」、\*臨時「〈明治百年〉：近代日本と歴史学の課題」、67年「帝国主義とわれわれの歴史学」、68年「承前——国家と人民」、69年「承前」、\*70年「人民闘争——安保体制新段階とわれわれの歴史学」、71年「人民闘争史の課題と方法」、72年「世界史認識と人民闘争の視点」、\*73年「民族と民主主義」、74年「承前」、75年「民族の形成」、76年「ベトナム解放とわれわれの歴史学」、77年「民族と国家」、78年「承前」、臨時「元号法制化とわれわれの歴史学」、\*79年「地域と民衆」、80年「承前」、81年「承前——国家支配」、82年「民衆の生活・文化と変革主体」、83年「東アジア世界再編と民衆意識」、84年「都市民衆の生活と変革意識」、85年「民衆の〈平和〉と権力の〈平和〉」、86年「承前」、\*87年「世界史認識における国家」、88年「承前」、89年「現代天皇制と世界史認識」、90年「歴史認識における〈境界〉」、臨時「歴史家は天皇制をどうみるか」、91年「〈境界〉続き」、92年「歴史の転換と民衆運動——国民国家」、∴93年

「情報—地域社会と国家」, 94年「奴隷包摂社会—奴隷論」, 95年「第二次世界大戦と戦後50年」, \*96年「世界史における20世紀」, 97年「承前Ⅱ」, 98年「承前Ⅲ」, 99年「承前Ⅳ」, ∴2000年「世界史認識と全体史の可能性」, 01年「民衆の生きた20世紀」, \*02年「グローバル資本主義と歴史認識」, 03年「公共性再考—グローバル化とナショナリズム」, 04年「グローバル権力〈帝国〉」, 05年「イスラームとアメリカ—民主主義という眩惑」, 06年「マルチメディア時代と歴史意識」, 07年「寄進の比較史—富の再配分と公共性」, \*08年「新自由主義の時代と現代歴史学—同時代史的検証」, 09年「承前—民衆運動研究」, ∴10年「植民地支配を問う」, 11年「近世・近代転換期の国家・地域社会—女性の経験」, 12年「変革の扉を押し開く—新自由主義への対抗構想と運動主体の形成」。

このリストをいかに読むか。先行する初期の普遍主義に比べて、「われわれ」の歴史学の守勢スタ

ンスとマンネリ（仲間内念押し<sup>うち</sup>流行現象、「まえ」にならぬの\*グループ群[\*内には発展・進化の場合もあるが]）とが気になる。〈われわれ〉意識に隠される切断・孤高・対峙を克服して、社会・自然との情報循環の太いパイプをフル稼働させるべきではないか。かつて、「〈われわれ〉の歴史学」のコンセプトが和田春樹さんから提起されたとき、私は疑義を呈した記憶がある。綱領第二の「歴史学の自由と発展とが、歴史学と人民との、正しいむすびつきのうちのみにある」の意味を顧みたい。原発事故は、あらためて科学と市民との関係を反省させている。「社会〔人民〕の科学」にこだわる歴研なのに、市民が関心もたぬ歴研大会。歴研危機は終わっていない。歴研の営み（会誌も日常の研究・交流活動も科学者コミュニティ・社会活動も）は、大会と不可分だ。まさしく全体知・〈全人〉知を支える全体史に向かって、試行錯誤を果敢に進める歴研であることを、期待したい。

「歴史評論」7月号(747号)のご案内(定価770円)

特集 「奥」からみる近世武家社会

特集にあたって……………編集委員会  
一夫一婦制と世襲制—大名の妻の存在  
形態をめぐって……………福田千鶴  
將軍御台所近衛熙子(天英院)  
の立場と行動……………松尾美恵子  
大名家の正室の役割と奥向の儀礼—近世後期  
の薩摩藩島津家を事例として……………松崎瑠美  
大名相続における女性……………大森映子  
將軍家「奥」における絵画稽古と  
御筆画の贈答……………木下はるか

\*

【歴史の眼】横浜市における「つくる会」

系教科書の採択とその背景……………加藤千香子  
【文化の窓】韓国での「併合一〇〇年」  
—ソウルで考えたこと②—……………君島和彦  
書評／鎌倉佐保著『日本中世荘園  
制成立史論』……………勝山清次  
書評／姜克實著『近代日本の  
社会事業構想』……………杉山博昭  
紹介／岡山藩研究会編『藩世界  
と近世社会』……………野尻泰弘  
紹介／吉見義明監修『東京裁判』……………宋 連玉  
【追想】重近啓樹氏を偲んで……………山根清志

▲最寄りの書店または歴史科学協議会(電話 03-3949-3749)までお問い合わせください。